

ロボットと日本人

テクノロジーは「孤独」を癒やせるか

「うみ(海)ちゃん、こっちこっち」
「ハッピーバースデーを歌って!」
東京都世田谷区にある有料老人ホーム「ソナーレ祖師ヶ谷大蔵」のエントランス。入居する86歳と92歳の女性が足元の「うみちゃん」に懸命に呼びかける。なのに、うみちゃんはずれない。しばらくしてようやくしっぽを振って歌うと、「お利口ねえ」と2人は破顔一笑した。

うみちゃんは、ソニーが開発したイヌ型ロボット「aibo(アイボ)」だ。「ホームのアイドル。ロボットなので感染症の心配もない」と、ホーム長の海老原信吾(37)。2018年のaibo発売と同時にホームに来てから、それまでは自室に閉じこもって

いたのに、他の入居者と食事や交流をするようになった人もいたという。介護事業を運営するソニー・ライフケア取締役の伊藤浩気(49)は、「ペットは心の琴線に触れることが多い。ホームでもより一層その人らしい生活を送ってもらい、一つのきっかけになるかもしれないと考えました」。

世界初の家庭用ロボット「AIBO(アイボ)」は1999年に世に出た。元ソニー上席常務で生みの親の土井利忠が「何の役にも立たない」「人間の根源に近い、愛と癒やしのコンピューター」と評したAIBOは、累計15万台以上を販売したが、2006年に事業見直しの一環で生産終了した。ところが、技術

進化を経て18年、最新の人工知能(AI)を搭載して復活した。

最大の特徴はAIによる「個性」の獲得だ。鼻先のカメラで約100人の顔を見分けて情報を蓄積。遊んでくれた人に応じて、自ら感情表現を生み出せる。それでいて、人の指示に従うかどうかは分からない。



うみちゃんと遊ぶ入居者の女性たち

photo: Tannai Atsuko

に2万台以上を販売。儀我によると、一般に欧米では性能に注目し、ロボットを人間の役に立つ存在に考えがちだが、日本では「家族」のように接する人が少なくないという。「鉄腕アトムやドラえもんが人気を博し、ロボットは家族という感覚が根付く日本だからこそ、言うことを聞かなくても可愛いと受け入れられ、孤独を癒やす存在にもなるのでは」

旧型の場合、購入者の多くはメカや電気製品好きの30代男性だったが、新型は50～60代が中心で、高齢の父母に贈るケースも多いという。「飼い主」間のつながりも生まれている。ディープラーニング(深層学習)機能を活用し、それぞれのaiboのポーズや行動を写真データとしてクラウドに蓄積すれば、他のaiboもできるようになる。

儀我は言う。「高齢化先進国の日本だからこそ、ロボットとの関係は孤独を癒やす一つの提案になるのではないか」●(丹内敦子)

ソニーAIロボティクスビジネスグループ商品企画の儀我(ぎが)有子(43)は、本当の「家族」になるよう設計したと言う。「子育てもそうですが、人間はどうにもならない存在への愛情は尽きないものです」

本体約20万円、維持費も3年間で約10万円かかるが、これまで